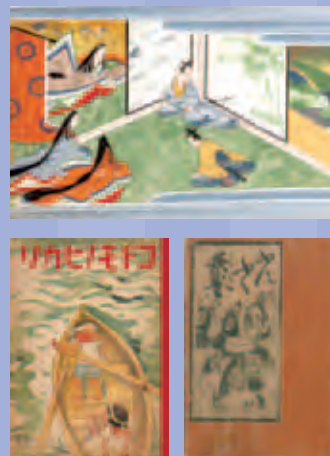


日本の絵本の歩み 略年表

時代・年代		時代・年代	
7世紀頃	製紙技術の日本渡来		
8世紀	『絵因果経』（絵巻の原形登場）		
764～770年	『百万塔陀羅尼經』（日本最古の印刷物） 『竹取物語』（日本最古の物語文学）	1967(昭和42)年	松居直／赤羽末吉『だいくとおにろく』（こどものとも傑作集36） 松谷みよ子／瀬川康男『いないいないばあ』 大塚勇三／赤羽末吉『スーホの白い馬：モンゴル民話』 加古里子『だるまちゃんとてんぐちゃん』（『こどものとも』131号）
12世紀	『源氏物語絵巻』 『鳥獣人物戯画絵巻』甲・乙巻	1968(昭和43)年	いわさきちひろ『あめのひのおるすばん』
室町時代 (1336-1573)後期	『奈良絵本』の登場		
1608年	『嵯峨本』の刊行『伊勢物語』（古活字）	1969(昭和44)年	レオ・レオニ／谷川俊太郎『スイミー：ちいさなちいさかなのはなし』 西巻茅子『わたしのワンピース』
寛永 (1624-44年)頃	『丹緑本』の登場	1971(昭和46)年	安野光雅『ふしぎなえ』（こどものとも傑作集）
寛文 (1661-73年)頃	江戸の「赤小本」・上方の「小本」の登場	1973(昭和48)年	田島征三『ふきまんぶく』
享保 (1716年-)頃	『赤本』『黒本・青本』の登場		
1765年	『錦絵』の起こり（鈴木春信ら、絵暦で多色摺り版画を創始）	1974(昭和49)年	なかえよしを／上野紀子『ねずみくんのチョコッキ』 ふるたたるひ／たばたせいいち『おしいるのぼうけん』
1775(安永4)年	『黄表紙』『金々先生栄花夢』登場	1975(昭和50)年	太田大八『かさ』（ジョイフルえほん傑作集10）
1806(文化3)年	『合巻』起こる		
1870(明治3)年	『絵入智慧の環』刊行	1976(昭和51)年	長谷川集平『はせがわくんきらいや』 谷川俊太郎／長新太『わたし』（『かがくのとも』91号）
1885(明治18)年	『ちりめん本』の登場		
1887(明治20)年	絵雑誌『教育 小供のはな誌』創刊	1977(昭和52)年	筒井頼子／林明子『はじめてのおつかい』（こどものとも傑作集）
1911(明治44)年	『日本一ノ画報』刊行	1979(昭和54)年	五味太郎『さる・るるる』
1914(大正3)年	絵雑誌『子供之友』創刊	1980(昭和55)年	丸木俊『ひろしまのピカ』 長新太『キャベツくん』
1918(大正7)年	児童文芸雑誌『赤い鳥』創刊		
1922(大正11)年	絵雑誌『コドモノクニ』創刊	1982(昭和57)年	やぎゆうげんいちろう『はなのあなのはなし』（かがくのとも傑作集）
1927(昭和2)年	観察絵本『キンダーブック』創刊	1983(昭和58)年	山下明生／杉浦範茂『まつげの海のひこうせん』
1936(昭和11)年	『講談社の絵本』創刊	1984(昭和59)年	片山健『どんどんどんどん』
1944(昭和19)年	絵雑誌の統廃合		
1949(昭和24)年	『世界の絵本』創刊	1991(平成3)年	荒井良二『ユックリとジョジョニ』 武田美穂『となりのせきのますだくん』
1953(昭和28)年	『岩波こどもの本』創刊	1996(平成8)年	和田誠『ねこのシジミ』
1956(昭和31)年	月刊絵本『こどものとも』創刊	1998(平成10)年	あべ弘士『ゴリラにつき』
		2000(平成12)年	井上洋介『でんしゃえほん』
1963(昭和38)年	松野正子／瀬川康男『ふしぎなたけのこ』（『こどものとも』87号） なかわりえこ／おおむらゆりこ『ぐりとぐら』（『こどものとも』93号）	2011(平成23)年	長谷川義史『ラーメンちゃん』
1966(昭和41)年	西内みなみ／堀内誠一『ぐるんぱのようちえん』（こどものとも傑作集32）	2014(平成26)年	たじまゆきひこ『ふじぎなともだち』 ミロコマチコ『オレときいる』



日本の絵本の歩み

——絵巻から現代の絵本まで

A History of Japanese Picture Books—From picture scrolls to contemporary picture books

国立国会図書館国際子ども図書館・ちひろ美術館共催展示会



はじめに	1	だい ぶ げんだい えほん 第4部 現代の絵本	11
第1部 絵本の源流	2	おも さんこうぶんけん 主な参考文献	14
第2部 絵本の歴史	3	にほん えほん あゆ りゃくねんびょう 日本の絵本の歩み 略年表	15
第3部 明治から戦前期までの絵本と絵雑誌	6		

はじめに

絵本には、長く豊かな歴史があります。日本の絵入り本の歴史は、8世紀、奈良時代の絵巻が最古とされ、以後、絵巻物は平安、鎌倉、室町へと続く伝統形式になります。その後、室町時代には冊子本の形式が生み出され、やがて江戸時代の版本草双紙へつながっていきます。

近代日本初期の絵本は草双紙の表現形式を受け継ぎつつ、西洋の絵本を翻訳などで消化しながら、明治・大正と独自に展開していきます。

第二次世界大戦後は、子どもの本の関係者の活発な活動により、実験的な試みや様々な表現による絵本文化が花開いていきます。

インターネットなど新たなメディアが普及し、一層表現方法が多様化していく現在、未来を見通す意味でも、日本の絵本の歴史を概観する試みは意義あることと考えます。それぞれの時代における絵本という視点で、1300年の日本の絵本の歩みをたどります。

この資料について

- この資料は国立国会図書館国際子ども図書館とちひろ美術館共催の展示会「日本の絵本の歩みー絵巻から現代の絵本まで」(平成29年11月1日～11月30日)の内容をまとめたパンフレットです。
- 国際子ども図書館とちひろ美術館が共同で執筆しました。
- 所蔵が記載されていない資料はすべて国立国会図書館所蔵資料です。
- 国立国会図書館所蔵資料図版の書誌事項の詳細は原則として国立国会図書館の目録を採用しました。表記は、タイトル・著者名等・掲載雑誌名等・出版者・出版年の順です。
- ちひろ美術館及び個人所蔵資料は絵本の原画です。名称等は各所蔵者のデータによります。
- 掲載資料は実際の展示とは異なる場合があります。

表紙の資料

左上から順に

- 『小袖曾我』[写] [江戸前期]
- 『コドモノヒカリ』6巻7号 帝國教育會出版部 1942
- 『ふんふく茶釜』刊 [鱗形屋] [江戸中期]
- 『伊吹とうし』[写] [江戸前期]
- 『ふしぎなだけこの』松野正子 作 瀬川康男 絵 (こどものとも87号) 福音館書店 1963
- 『戦いのなかの子どもたち』より いわさきちひろ 1973 ちひろ美術館蔵
- 『月夜の精』岡本帰一 1920 ちひろ美術館蔵
- 『ライオンのながいいちにち』より あべ弘士 2004
- 『だんだんだんだん』片山健 [作] 文研出版 1984
- 『だるまちゃんのとんぐちゃん』加古里子 作・絵 (こどものとも131号) 福音館書店 1967
- 『人形の夢』武井武雄 制作年不明 ちひろ美術館蔵

絵本の源流

絵本の絵は、文字で書かれた内容を分かりやすく示すためのものであると同時に、見て楽しむためのものでもあります。文字と絵はお互いに補足し合い、絵本の内容を豊かにしています。

絵入りの作品は、ページをまとめた冊子装、つまり現在の「本」の形が一般的になる前から製作されていました。それは絵巻、つまり文字(詞書)と絵を交互に展開する巻物の形をした作品です。こうした装丁のことを卷子装と呼びます。

ページの大きさがあらかじめ決まっている冊子に対し、卷子はそれぞれのまとまり(段)の長さが内容の量によって決まり、必ずしも一定ではありません。また、巻いてある卷子をどの位広げて見るのか、見る人自身がその都度決めることができます。

■絵のついた「お経」ー絵因果経

8世紀(奈良時代)の「絵因果経」(『過去現在因果経』)では、下段の経文に、釈迦の前世や釈迦として生まれてからの物語がまとめられています。上段には下段のエピソードに対応した場面を描いて、上下で組み合わせた構成になっています。

「卷子に描いてあること、文字と絵の組み合わせであること」という共通の特徴はこうした絵入り経が絵巻物の原形であることを想像させます。しかし、「上下で文字と絵を組み合わせる」手法は、のちの絵巻物には継承されませんでした。

■さまざまな絵巻ー物語の多様化

「絵因果経」の後、12世紀(平安時代)までには文字(詞書)と絵が交互に展開する絵巻物が登場します。

鑑賞者はより物語の展開を楽しむようになりました。表現形式が確立したことで、登場人物の恋や悩み、事件ものなど、主題もさまざまになります。例えば「道成寺絵巻」は僧侶に恋するあまり、女性が大蛇へと身を変じてしまう、少し怖い不思議な物語です。

また「竹取物語」は竹から生まれ、月へと帰るかぐや姫の物語で現在に至るまで親しまれているストーリーです。



▲「竹とり物語」中[写] [江戸前期]



◀「道成寺繪巻」2 [写] [江戸時代]

第2部 えほん れきし 絵本の歴史

室町時代の末に、巻子の形から綴じられた冊子の形となった奈良絵本が誕生します。そこには、巻物という形のもつ不便さから、より扱いの簡単な冊子への自然な移行がありました。すなわち、絵巻の簡略な絵本化ともいえるものです。ただ、奈良絵本は一点一点手作りで、限られた人の目にしか触れられないものでした。

江戸時代に入ると、一枚の版木に文字や絵を彫って印刷された本が普及し、商業出版の出現と相まって庶民にも読者層が広がります。室町時代に始まった御伽草子とよばれる短編の小説に絵をつけ、印刷して読まれるようになります。



丹緑本などはそのようにして奈良絵本を大衆化した形です。

◀『小敦盛』下巻【写】
〔江戸前期〕（奈良絵本）

子どもにも広がりを見せた本は17世紀の半ばころから現れます。それが、草双紙の先駆けの赤小本です。草双紙とは、江戸時代の庶民に読まれた絵が主な本で、その表紙の色から赤本や黒本・青本、黄表紙、合巻と呼ばれる本の総称です。また、合巻と同じように華やかな表紙をもつ、サイズの小さい豆本、そして一枚刷りのおもちゃ絵という、さまざまなテーマを持った印刷物も江戸末期に登場します。

これらは、明確にはどれを大人が読み、どれを子どもが読んだか線引きしにくいもので、複数の読者が一緒に音読したり、貸本屋から借りて読むことが多かったといわれています。そして、それぞれの絵入り本の中身を見ると、現代の絵本や漫画にも通じるような絵とテキストの見せ方の工夫が随所に感じられ、絵がとても大切な要素であったことも見てとれます。



▲『くまのほんち』下
〔寛永末-正保頃〕刊
（丹緑本）

■奈良絵本・絵巻、丹緑本

巻物が小型化し、奈良絵巻ともいわれる御伽草子や舞の本の小さな絵巻が現れます。奈良絵本は、金銀箔、胡粉を用いた極彩色の絵で、昔は棚かざり本とも呼ばれたほどで、縦型と横型の判型がある冊子体のものでした。丹緑本は、墨摺りの版本に、手彩色で朱、緑、黄色などを加えたもので、時期や題材は奈良絵本と重なるものが多いと言われます。

■草双紙

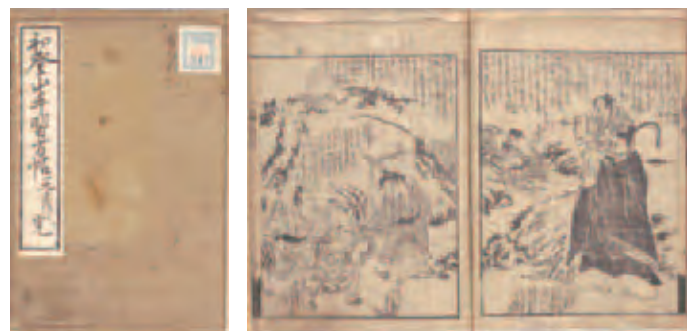
朱色の表紙の赤本は、昔話を中心に文字が少ないものでした。墨色や萌黄色の黒本・青本では浄瑠璃や歌舞伎の筋書きなども取り入れられ、黄色（藁色）の黄表紙ではさらに滑稽や世相の風刺も含まれ、大人の読者を獲得していきました。

そして作品が次第に長編化し数冊を合冊したのが合巻です。

草双紙は木版印刷で量産ができ、安価だったため、一般庶民でも購入でき、子どもたちも楽しめるようになりました。



▲『むぎなのかたきうち』刊
〔江戸前期〕（赤小本）



▲『初登山手習方帖』十返舎一九【画作】刊
〔榎本屋吉兵衛〕寛政8〔1796〕（黄表紙）

■ちりめん本

1885（明治18）年ごろから昭和初期まで、「ちりめん本」という欧文の小型絵入り本が作られました。和紙に多色木版で絵を刷り、絹織物の縮緬のようなしわ加工をしたのち、活版で文字を印刷し、和綴じにしています。日本の昔話などを宣教師や教員等として来日した外国人が翻訳し、小林永濯などの絵師が絵を手がけています。英語のほかフランス語・ドイツ語・オランダ語・スペイン語などがあり、日本居住の外国人や海外輸出向けに出版され、来日した外国人の土産にもなりました。



◀Japanese Märchen

[3]. Der Kampf der Krabbe mit dem Affen=猿蟹合戦
ア・グロタ 訳述 T. Hasegawa
1885.12-1889.11（ちりめん本、ドイツ語）

まつさか し いざわちやう じぞう ぼ さつ 松阪市射和町の地蔵菩薩と

きんせいしよ き かみがた こども え ほん 近世初期上方子供絵本

1980（昭和55）年、三重県松阪市の旧射和寺にある地蔵菩薩の胎内から、12冊の小型絵本と手習いの反故等の紙類が見つかりました。

本の見返しの書き入れや、一緒に入っていた書き付け等から、1678（延宝6）年に10代で没した帯屋長九郎の供養のために父親の帯屋次郎吉が地蔵菩薩の胎内に納めて寄進したことが推定されました。

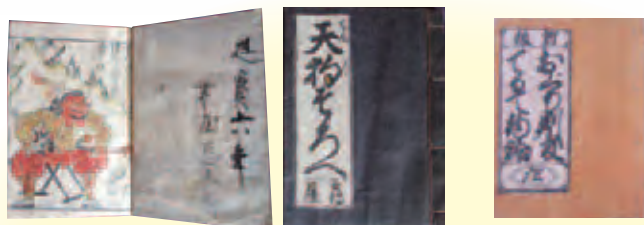
この絵本類の中には1677（延宝5）年以前の刊行年と、京都の版元の名が刻されたものがあります。

それまで、子ども向け絵本は、1678（延宝6年）に江戸で出版された赤小本が確認できる最古のもので、江戸から始まったと考えられていました。しかし、この発見によって同時期あるいはそれより先に上方でも出版されていたことがわかったのです。また、実際に子どもが持っていた本であるらしいという点においてもこの絵本類は大変興味深い資料です。



▲木造地蔵菩薩坐像（重要文化財）
南北朝時代（14世紀）
松阪市射和町 射佐神社蔵
胎内から絵本類が見つかった地蔵菩薩

きんせいしよ き かみがた こども え ほん
近世初期上方子供絵本（三重県指定文化財）松阪市射和町自治会蔵



▲『天狗そろへ』（刊記なし）の表紙と見返し
見返しに「延宝6年 帯屋長九郎」という墨書がある。
この墨書と天狗の絵の彩色は子どもによるものと推定されている。



▲刊記があるものでは一番古い、
寛文7（1667）年刊の
『牛若千人切はし弁慶』
10冊のうち2冊が赤小本で
他の表紙は墨色だった。



▲赤小本『軍舞』
寛文8（1668）年刊
表紙と見開き

協力：松阪市射和町自治会

だい 3 ぶ 部

めい じ せんぜん き え ほん え ざっ し 明治から戦前期までの絵本と絵雑誌

奈良絵本や草双紙に代表される絵入り本は長く続きました。明治初期にも絵入りや絵解きの本は出版されていましたが、今日のような子どものための絵本につながる本が登場したのは明治も後半、1900年代になってからのことです。西洋の新しい印刷技術が導入され多色印刷が飛躍的に普及したこと、また、西洋から近代的児童観を含む新しい思潮がもたらされ幼児教育制度が整備されたこと、日清・日露戦争による戦時景気の影響などが考えられます。

子どものための絵本の歴史を考える時、明治時代から始まった「絵雑誌」と単行の「絵本」という二つの大きな流れを無視することはできません。

この第3部では、その「絵雑誌」と「絵本」の二つに分けて、明治期から戦前期までの絵本の歩みを追っていきます。



▲『少年智識画報』2号 近事畫報社 1905



▲『絵入智慧の環』初編 上
古川正雄 著 古川正雄 1872

絵雑誌の歩み

近代日本の児童文学のメディアとして用いられたのが児童文芸雑誌です。対象読者は少年から少女へ、そして低年齢層へと多様化していき、幼年向けに絵を中心とした絵雑誌が刊行されるようになりました。

やがて大正期に入ると、大正デモクラシーの自由な雰囲気と好景気に支えられ、芸術性を重視する児童文芸雑誌が創刊され、それと同時に、より質の高い絵を中心にした絵雑誌が次々に創刊されました。

そして『コドモノクニ』の登場により、絵雑誌はさらに勢いを増します。児童文芸雑誌の専属画家が一堂に会して作品を発表し、競い合いながら芸術を模索していく場となりました。

しかし昭和恐慌を経て戦争の時代に入ると、これらの絵雑誌は戦時統制によって統廃合され、衰退していきま

■草創期の絵雑誌

現在確認されている日本最古の絵雑誌は、『教育 小供のはな誌』です。モノクロ印刷の数ページの小冊子でした。

多色印刷の絵雑誌の最初の例は、大阪で創刊された『お伽絵解こども』とされています。欧米の絵本をもとにしたモダンな誌面は、その後の絵雑誌に大きな影響を与えたと言われています。

この『お伽絵解こども』に刺激されたかのように、その後東京でも『家庭教育 絵ばなし』、『少年智識画報』、『少女智識画報』、『幼年画報』などが次々に創刊されました。

■『赤い鳥』の画家たち

大正期、『赤い鳥』など、子どもの無垢な心を大切にする「童心主義」にもとづいた児童文芸雑誌が相次いで創刊されました。明治期の児童出版の絵の描き手は日本画家が中心でしたが、『赤い鳥』などでは洋画家が活躍しました。『赤い鳥』の清水良雄、『金の船』の岡本帰一、『童話』の川上四郎、『おとぎの世界』の初山滋らがそれぞれ専属の画家として腕をふるい、その後、絵雑誌へと活動の場を移していきます。

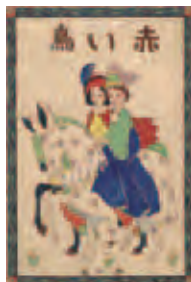
こうした子どものための本に描かれた絵を「童画」と名付けたのは武井武雄ですが、画家は「童画家」と呼ばれるようになります。



▲『幼年画報』7巻8号 博文館 1912



▲『子供之友』1巻6号 婦人之友社 1914 (表紙絵 北澤楽天)



▲『お馬の飾り』(赤い鳥) 創刊号 表紙絵 清水良雄 1918 ちひろ美術館蔵

▲『チイサイセンセイ』『コドモノクニ』5巻3号より 岡本帰一 1926 ちひろ美術館蔵

■絵雑誌黄金時代

大正初期に近代的な児童観に立って相次いで創刊された絵雑誌は、第一次世界大戦の好景気の波に乗った産業と教育がうまく呼応したことによって、黄金時代を迎えます。

多くの絵雑誌が幼児教育の専門家を編集・顧問・主筆に迎えており、

教育的な『コドモ』や『子供之友』、芸術性に重きをおいた『コドモノクニ』、『コドモアサヒ』、観察絵本という新しい分野を開いた『キンダーブック』などが質の高い児童文化を確立する役目も果たしました。



▲『コドモノクニ』8巻4号 東京社 1929 (表紙絵 清水良雄)



▲『キンダーブック』1巻8編 日本玩具研究会 編 フレーベル館 1929 (表紙絵 的場朝二)

■15年戦争下の絵雑誌

1931(昭和6)年の満州事変から1945(昭和20)年の太平洋戦争の終結までの時期は絵雑誌の世界にも大きな影響を及ぼします。

1938(昭和13)年に国家総動員法が可決されると、同年「児童読物改善ニ関スル指示要項」が通達されて、戦局により物理的・内容的に統制が加えられます。雑誌の統廃合も進められ、『キンダーブック』は『ミクニノコドモ』、学年別雑誌『幼稚園』は『ツヨイコヨイコ』と改題しました。

『コドモノヒカリ』などはこの時期に創刊されましたが、1943(昭和18)年に『子供之友』、翌年に『コドモノクニ』が休刊し、1945年にはその他の絵雑誌も『日本ノコドモ』に統一され、同誌もやがて休刊となりました。

■戦後の絵雑誌

戦後いち早く復刊を果たしたのは『日本ノコドモ』で、次いで『キンダーブック』も1946(昭和21)年には復刊しました。

その後、『家庭エホン』、『コドモノハタ』、『ふたば』、『フレンドブック』、『幼年ブック』、『えほんのくに』など、戦前の絵雑誌の流れをくんだ絵雑誌が次々に創刊されましたが、残念ながら短命で終わりました。

その中で創刊された『ベビーダイジェスト』(1953(昭和28)年に『こどものせかい』と改題)は、物語だけでなく、絵が果たす役割を重視するという新しい取り組みの雑誌でした。



▲『ミクニノコドモ』15巻1編 日本保育館 編集 日本保育館 1942 (表紙絵 齋藤長三)



▲『日本ノコドモ』8巻8号 国民図書刊行会 1944 (表紙絵 齋藤長三)

近代「絵本」のはじまり

明治維新後約20年間の絵本には、赤本など草双紙の伝統を引き継ぐ絵本、翻訳絵本、在日外国人グループによるちりめん本等がありました。

今日の「絵本」が意識され出すのは明治末期で、印刷技術の発展を背景に、多色刷の出版物が増え、現代の絵本につながる歴史が動き始めました。

■黎明期の絵本

『絵入智慧の環』は近代日本の絵本の起点と言われています。初編は文字と絵を組み合わせて身近な物や言葉などを子ども向けに示していて、今日の知識絵本にもつながる本です。

明治中期には、欧米文学の翻訳絵本が登場しました。『WAMPAKU MONOGATARI』、そして『八ツ山羊』と『おほかみ』です。日本の伝統的印刷技術で西洋の文学と絵を表現した新しい絵本であり、その後の翻訳絵本の先駆けとも言えるでしょう。

■絵本の広がり

明治末期には、「画帖」や「絵ばなし」と称される、「絵本」という意識のある本が出版され始めます。そんな中、1911（明治44）年から大正初期に刊行された〈日本一ノ画帖〉シリーズ（全35冊）は、巖谷小波の文に杉浦非水・小林鐘吉・岡野栄の3人の画家が交互に絵を描いたすぐれたデザインの小型本です。日本の近代絵本史に残る傑作と言われています。

その出版元の中西屋書店と組んで、巖谷小波は次々に絵本を刊行しました。『いろはスケッチ子供四十八景』や『オハナシ』などで、多くの絵を配した新しい意欲的な絵本作りに取り組んでいます。

1910年代の半ばから約10年間は、あまり目立った絵本作品は生まれていません。この理由の一つには、1918（大正7）年の『赤い鳥』を皮切りに児童文芸雑誌が次々に創刊され、画家たちは雑誌や童話集や単行本の挿絵や装丁に忙しく、絵本にまで手がまわらなくなっていたことがあげられています。

そのような時期に生まれた、〈どんたく絵本〉シリーズや、コマ割り形式の〈正チャンの冒険〉シリーズは新しい時代の到来を感じさせるものでした。



▲『糸ほんをしえくさ』3「あまやどり」山田仙 著
山田仙 1889



▲『ナカニシヤ日本一の画帖』
「[1] イッスンボウシ」巖谷小波 著
杉浦非水 等画 中西屋 1911

美しい造本

絵本が低迷していた大正末期に、富山房から童話集〈模範家庭文庫〉（1915～33（大正4～昭和8）年）が刊行されました。楠山正雄が企画・編集に携わり、装丁・挿絵に岡本帰一を起用しました。岡本が子どもの本の絵に関わるようになったのはここからでした。内容とともに豪華な装丁のこの叢書は、後の児童書に大きな影響を与えました。楠山はその後同じ富山房から、さらに挿絵を重視した小学校各学年向けの〈画とお話の本〉シリーズを刊行しました。



▲『一寸法師』（コドモエホンブンコ）より
初山滋 1928 個人蔵

■試行錯誤・意欲的な実験

雑誌の創刊ラッシュも一段落し、画家のエネルギーが絵本にも向けられるようになったのか、昭和に入ると〈コドモエホンブンコ〉、〈絵断世界幼年叢書〉、〈鈴の絵本〉等の意欲的なシリーズものの絵本が次々に刊行されるようになります。

1936（昭和11）年には〈講談社の絵本〉が刊行を開始します。全203冊になるこのシリーズは、著名な画家を起用し、1冊1テーマの極彩色の単行本物語絵本という形式が画期的で、以後の絵本に大きな影響を与えました。

「かちかち山」尾竹國観 繪 松村武雄 文
大日本雄辯會講談社 1938（講談社の絵本：58）



■戦時下の絵本

1931（昭和6）年に満洲事変が起り、日本は長い戦争の時代に入ります。

1938（昭和13）年には言論統制である「児童読物改善二関スル指示要綱」が内務省から出版業者へ通達されましたが、「指示要綱」の作成にあたって学識経験者等の意見を取り入れたため、芸術的で良心的な子どもの本が一時的に復興する現象が起りました。この時期に〈小学科学絵本〉や〈帝教の絵本〉、〈新日本幼年文庫〉、〈少国民絵文庫〉などのシリーズが生まれたのは、その「復興現象」の現れといえます。

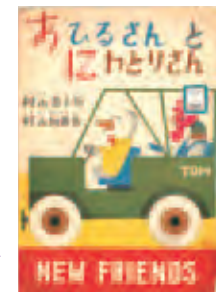
■戦後、占領下の絵本

1945（昭和20）年に第二次世界大戦が終わり、戦争によって壊滅状態だった出版界は、自由と民主主義という新しい価値観のもと再出発をします。印刷所も紙も不足しているなか、「仙花紙」と呼ばれた粗悪な紙で作られた雑誌や本が飛ぶように売れました。食糧と同様に、国民は文化をも渴望していたのでしょう。絵本もこの「仙花紙」の時代からはじまります。

一方で、1949（昭和24）年までは、GHQ*の検閲が行われていた時期でもありました。

*GHQ/SCAP（連合国最高司令官総司令部）

「あひるさんとにわとりさん」村山簡子 作 村山知義 繪
ニューフレンド 1948



第4部 げんだい えほん 現代の絵本

■戦後～1950年代の絵本

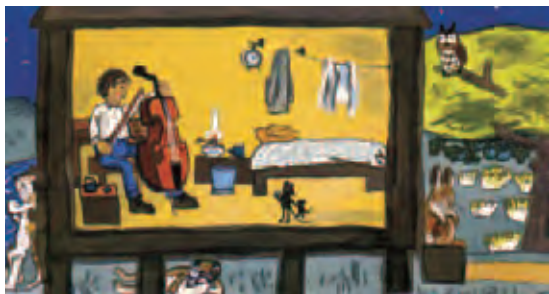
1945（昭和20）年8月15日、日本は終戦を迎え、「忠君愛国」を国民道徳とする教育内容は、個人を尊重する教育へと変わり、子どもの本の世界も一転します。翌年3月には、児童文学者協会が創立し、7月には、初山滋、武井武雄らが中心となって日本童画会が結成されて、子どもの本の関係者の活動が本格的に始まります。

民主主義の国をめざし、子どもに未来への夢と希望を届けようとする時代の気運の中、戦後の早い時期から『子供の廣場』『赤とんぼ』等の児童雑誌が次々と創刊され、数多くの小出版社も生まれ、絵本も出版されました。

この時代、著しい物資不足の中で、また、GHQの検閲下、統制も厳しいものがありましたが、「二度と戦争を繰り返さず、平和な国を建設する」、その担い手となる子どもを育てようと、作家、画家、編集者は熱い思いにあふれていました。

1950年代に入ると、GHQによる占領政策が終わり、日本は復興期を迎えます。絵本では、1949（昭和24）年の新潮社〈世界の絵本〉シリーズにつづいて、1953（昭和28）年に創刊された岩波書店の〈岩波の子どもの本〉では、石井桃子が編集長をつとめ、オリジナルの判型を小型の変形菊判に統一して、『ちびくろ・さんぼ』を始め、『ちいさいおうち』や『ひとまねごころ』などの高い水準の外国絵本の翻訳とともに、日本の昔話絵本『ふしぎなたいこ』や『おそくばのくきはなぜあかい』を刊行しました。

1956（昭和31）年、「もはや「戦後」ではない」と『経済白書』で語られたこの年、福音館（後の福音館書店）が、月刊の物語絵本『こどものとも』を創刊します。絵雑誌が中心だった日本で、月ごとに1冊の絵本を創るという画期的な企画でした。編集者の松居直は、幅広いテーマに取り組み、洋画家や日本画家、漫画家、彫刻家、デザイナーなどさまざまなジャンルから個性豊かな描き手を起用して、絵本の幅を広げます。〈岩波の子どもの本〉、『こどものとも』は、ともにその後の日本の絵本づくりに大きな影響を与えました。



▲『セロひきのゴージュ』より 茂田井武 1956 ちひろ美術館蔵



▲『みつばちの冒険』後藤権根 著 吉岡堅二 絵 新潮社 1950（世界の絵本 大型版；5）

■現代の絵本作家 I 1960年代～70年代の絵本

朝鮮戦争をきっかけに、経済復興を遂げた日本は、1960年代に入ると、高度経済成長に沸きます。この時期、至光社や童心社、こぐま社、偕成社等の児童書専門の出版社が、明確なコンセプトを持って絵本に取り組むようになります。

1973（昭和48）年、絵本の専門雑誌『月刊絵本』が創刊され、作家、画家、編集者たちが、真剣に絵本とはなにかを模索し、実験的な絵本も次々に出版されます。1970年代は、国内では高度経済成長を経て公害や自然破壊などさまざまな社会問題が顕著となり、一方、世界的にはベトナム戦争が大きな問題となっていました。子どもを取り巻く環境も大きく変化の中、物質的な豊かさだけでなく、精神的な豊かさが問われるようになった時代でもあります。

絵本の作り手の中にも、問題意識を持って絵本づくりに取り組む動きが出てきます。田島征三が中心となったベトナム反戦野外展には、井上洋介、長新太、いわさきちひろなども出展しました。また、絵本出版に携わる出版社もさらに増え、絵で展開する絵本、文字なし絵本、読者を子どもに限定しない絵本など、従来の絵本の枠組みを超えたさまざまな絵本表現が生まれました。さらには、物語は作家が書き、画家が絵を描くという絵本づくりから、画家が物語も絵も創作するタイプの絵本づくりが本格的に登場してくるのも、この1960～70年代です。

いわゆる「絵本ブーム」とも呼ばれたこの時代、今日、累計発行部数600万部を超える絵本『いないいないばあ』を始め、『スーホの白い馬』、『キャベツくん』、『ふきまんぶく』、『あめのひのおるすばん』、『わたしのワンピース』など、今も読み継がれる絵本が数多く生まれました。



▲『スーホの白い馬：モンゴル民話』
大家勇二 再話 赤羽末吉 絵 1967
福音館書店（日本傑作絵本シリーズ）



▲『あめのひのおるすばん』より いわさきちひろ 1968
ちひろ美術館蔵



◀（左）『ふきまんぶく』より
田島征三 1973
ちひろ美術館蔵

（右）『わたしのワンピース』より
西巻茅子 1969
ちひろ美術館蔵

■現代の絵本作家Ⅱ 1980年代から2000年代（今日）まで

1980年代に入ると、子どもを取り巻く環境はさらに大きく変化します。日本経済はバブル景気を迎え消費社会が進み、1970年代の反戦運動や社会運動の動きは衰退していきます。この時代、多くの絵本が出版されては次々に消えていきましたが、自然破壊が進み核家族が一般化するなか、いわむらかずおの〈14ひきのシリーズ〉が人気を得ます。

バブル経済の急速な崩壊を迎えた1990年代、太田大八が中心となり、絵本ジャーナル『PEE BOO』が創刊され、絵本作家や画家たちが自ら活発な絵本評論を展開しました。1997（平成9）年、絵本の諸領域を横断的に研究し議論する開かれた場として絵本学会も設立されます。また、1991（平成3）年から、〈イメージの森〉と題した絵本シリーズ（ほるぷ出版）がスタートし、荒井良二、伊藤秀男、山本容子といった画家たちが絵本の世界で活躍を始めました。1990年代には国内に次々と絵本美術館が誕生し、絵本原画展も数多く開催されるようになり、絵本は文化のひとつとして広く認識されるようになりました。

21世紀に入り、絵本の世界では戦後の日本の絵本を支えてきた画家たちが現役を退く一方、子ども時代に60、70年代の隆盛期の日本の絵本を楽しんだ世代が、作家、編集者として登場してきました。また、コンピュータの一層の普及は、絵本表現とその読まれ方双方に多様化を生んできています。

他方、2011（平成23）年3月11日の東日本大震災とそれに伴う福島原発事故という未曾有の大規模災害、人災は、作家たちに絵本の在り方を問い直すことにつながります。戦争と平和、生と死、心、絆等をキーワードに、人間にとって大切なものは何か等、切実なテーマが、今日、絵本には真摯に問われています。



▲『オレときいろ』
ミロコマチコ 作 WAVE出版
2014（装丁 大島依提亜）



▲『ユックリとジョジョニ』より
荒井良二 1991
ちひろ美術館蔵



▲『まつげの海のひこうせん』より
杉浦範茂 1983 ちひろ美術館蔵



▲『となりのせきのますだくん』より
武田美穂 1991 ちひろ美術館蔵



▲『でんしゃえほん』より
井上洋介 2000 ちひろ美術館蔵

日本の絵本の歩み 主な参考文献

【事典】

- 『草双紙事典』叢の会 編 東京堂出版 2006
- 『図説 絵本・挿絵大事典 第1巻 図説 日本の児童書四〇〇年』川戸道昭、榊原貴教 編著 大空社 2008
- 『絵本の事典』中川素子、吉田新一、石井光恵、佐藤博一 編 朝倉書店 2011
- 『ベーシック絵本入門』生田美秋、石井光恵、藤本朝巳 編 ミネルヴァ書房 2013

【概説書】

- 『日本の童画 第1巻（武内桂舟、川上四郎、本田庄太郎）』第一法規出版 1981
- 『絵本論：瀬田貞二子どもの本評論集』瀬田貞二 著 福音館書店 1985
- 『はじめて学ぶ日本の絵本史1〜3』鳥越信 編 ミネルヴァ書房 2001〜2002
- 『小さな絵本美術館：カラー版』鳥越信 著 ミネルヴァ書房 2005

【全集】

- 『新修日本絵巻物全集 1 絵因果経』監修：田中一松 角川書店 1977
- 『草双紙集』（新日本古典文学大系83）木村八重子、宇田敏彦、小池正胤 校注 岩波書店 1997

【研究書】

- 『絵巻』奥平英雄 著 美術出版社 1957
- 『本の美術史：奈良絵本から草双紙まで』小野忠重 著 河出書房新社 1978
- 『初期上方子供絵本集』（貴重古典籍叢刊13）岡本勝 著 角川書店 1982
- 『落穂ひろい：日本の子どもの文化をめぐる人びと』瀬田貞二 著 福音館書店 1982
- 『近世子どもの絵本集 江戸篇』鈴木重三、木村八重子 編 岩波書店 1985
- 『近世子どもの絵本集 上方篇』中野三敏、肥田昭三 編 岩波書店 1985
- 『子ども絵本の誕生』（シリーズ・にっぽん草子）岡本勝 著 弘文堂 1988
- 『ちりめん本のすべて：明治の欧文挿絵本』石澤小枝子 著 三弥井書店 2004
- 『魅力の奈良絵本・絵巻』石川透 編 三弥井書店 2006

【展覧会図録等】

- 『日本の子どもの本歴史展：図録17世紀から19世紀の絵入り本を中心に』1986年子どもの本世界大会周辺プログラム委員会 企画・編集 日本国際児童図書評議会 1986
- 『戦後絵本の歩み展：絵本表現の可能性を求めて』いわさきちひろ絵本美術館 1986
- 『ちりめん本と草双紙：19世紀後半の日本の絵入本 特別企画展』福生市郷土資料館 1990
- 『子どもの本・1920年代展図録』日本国際児童図書評議会事業委員会子どもの本・1920年代展実行委員会 企画・制作 日本国際児童図書評議会 1991
- 『芸大美術館所蔵名品展：開館記念』東京芸術大学大学美術館 編、山崎由美子 翻訳 日本経済新聞社、NHK 1999
- 『絵本と絵巻：時を紡ぐ、ゆたかに語る』新潟県立近代美術館 編 新潟県立近代美術館 1999
- 『日本の絵本100年展』伊藤元雄 解説・編集 ブック・グループ社 2000
- 『大絵巻展：国宝「源氏物語絵巻」「鳥獣戯画」など一堂公開：特別展覧会』京都国立博物館 編 読売新聞社 2006
- 『国宝大絵巻展：京都国立博物館所蔵・寄託の名宝一挙大公開』九州国立博物館 編 九州国立博物館振興財団 2008
- 『絵本の歩み—安曇野ちひろ美術館歴史展示室ガイド—』ちひろ美術館、辻村益朗 編集 ちひろ美術館 2008
- 『物語絵巻の世界：國學院大學図書館所蔵作品を中心に』針本正行 監修 國學院大學博物館 2012
- 『神仏・異類・人—奈良絵本・絵巻にみる怪異—』針本正行 監修 國學院大學博物館 2015

展示会名 国立国会図書館国際子ども図書館・ちひろ美術館共催展示会

「日本の絵本の歩み—絵巻から現代の絵本まで」

発行 国立国会図書館 平成29年11月1日発行

編集 国立国会図書館国際子ども図書館 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49

TEL: 03-3827-2053（代表） URL <http://www.kodomo.go.jp/> ISBN 978-4-87582-804-4